

## 「おさしづ」第6巻における教会事情と「道」

『おさしづ改修版』第6巻(明治35～40年)の教会事情における「道」の用例を整理する。第6巻には本部事情の「おさしづ」が2,451件(内、巻末にまとめられているのが2,430件)ある。そのうち、「道」が用いられるのは24件(内、巻末の分が14件)、3回以上「道」が繰り返し用いられるのは1件である。

## 教会事情と「道」

上記の件数を見てわかるように、第6巻の教会事情の「おさしづ」において、「道」という言葉が用いられるのは非常に少ない。それが最大の特徴と言ってもよいくらいである。

第5号の教会事情について整理した際にも述べたように、教会事情の「おさしづ」は、ほとんどが教会の設置願、事務所の修繕、開講式などのお許しを願うものである(本誌第21巻7号参照)。そうした願いには、いずれの場合も、「許し置こう」と比較的簡潔な言葉が下されており、そのなかに「道」は出てこない。

それでは、どのような場合に「道」が用いられるのであろうか。第6巻の教会事情からその割書をいくつか例示すると、次のようになる。

「河原町部内氷上支教会付属の秋廣出張所を、大垣部下六郷出張所の付属に変更願」(さ35・3・23 割書)

「奈良支教会担任変更願(新担任、春野喜市)」(さ36・9・18 割書)

「烏ヶ原分教会長後任選定願」(さ36・10・20 割書)

「宇佐部内都郷布教所を犀川と改称の上、移転及び担任変更願」(さ37・3・17 割書)

ここに挙げた割書のなかに「変更」という文字が目立って見えるように、「道」という言葉が用いられるのは、いずれも、教会の付属(所属)、会長あるいは担任、名称、場所などの「変更」を願い出た「おさしづ」である。変更を余儀なくされるような事情があったものと理解できるが、そのなかを教会としてどのように歩みを進めるべきか、「道」という言葉を用いて説かれている。

## 精神一つの道

そうした「道」の用いられた教会事情の「おさしづ」を読むと、心や精神という言葉が多用されている。

「これより明らかな道を付けて、それへ頼もしへという一つ精神を定めて、もう何年経たら、これ万劫末代の理を作り取るも精神一つの道である。古き事情にも知らしである。願う処の理は、暫くへ順序の理よう聞き分け。一つしっかりへと改め。事情一つ理一つの心、何よの事もよう聞き分け。一つ理ありた。さあすつきり一つ改めてこうと云えば、さあ神の日々守護という。案じる事要らん。精神一つの道が付く程に。」(前掲、さ36・10・20)

これからは「頼もしへという一つ精神」を定めるように言われている。その精神を定めて通れば、「精神一つの道」が付くと説かれる。「おさしづ」における「精神」には、心の能動的な働きを強調する独特な含意があるとされる(『天理教事典第三版』)。それでは、精神一つの道とは、どういう道であらうか。

「遠く所遙かな事情でも皆治まりてある。いかな事情も治

まりある。元一つの道でありながら、一つの心皆そもへで通るから、何したんぞいなあと言うようになりたる。……皆心の精神の理を以て、一つ出たる理に心を添うてひとすじ一条の道を通れば、これからと言う。」(さ39・11・28 旭日支教会長岡本善六辞職に付、山澤爲造後会長に御許し願)

ここでは「心の精神の理」をもって行うべきことは、「一つ出たる理に心を添うて一条の道」を通ることだと論される。また、別のところでは次のようにも言われている。

「これから一つ改め替えて、何事するにも運ぶにも、何人一つの理結んでくれ。どれだけ安心取り損うても、一つの理に運べばこれが天の理。道である。」(さ40・2・21 旭日支教会移転願)

つまり、「精神一つの道」というのは、「一つ出たる理に心を添うて一条の道を通れば、これから」見えてくる道であり、また、「一つの理に運べば」それが天の理にかなう「道である」と言われるところのものと思われる。

「一つ出たる理」や「一つの理」という表現は、単に数量としての一つではなく、「元の」という意味を持っている。したがって、「一つ出たる理」とは、さしあたり教会がはじまった元の思い、理合いといった意味合いに取ることができる。

「本部という理あって他に教会の理同じ息一つのもの。この一つの心治めにゃ天が働き出来ん。……唯一つ教という心で、通らにゃならん。さあ教祖存命の理という。どういうものこいうもの、聞き分け治めてくれ。」(さ39・12・13 河原町分教会の教祖赤衣、裁判所より帰りましたら、本部より行って治めますものか願)

本部も教会も、元は一つのところ、すなわち教祖にはじまる。「一つの理に運ぶ」あるいは「一つ出たる理に心を添う」とは、ひたすら教えを頼りに教祖を慕い行くということであり、皆がそうした心を治めて通るところに道は開けると説かれている。

## 先という道は鮮やかという道

教会にとって、さまざまな変更を余儀なくされるのは簡単なことではない。

「さあ変わる人という、容易やあろうまいへ。一つ事情精神一つ事情、何かの処という、皆々の心という。何であろうへ、何であろうがよう聞き分け。いかなる事もどういう事も、危ない怖わい。先という道は鮮やかという道である。」(さ37・9・30 中和分教会従来植田栖松分教会長たりし処都合にて辞職に付、後担任平野栖蔵に変更願)

容易でない事情のなかで苦心する人々に、皆が教えを頼りに教祖を慕い行くという心を治めれば、先には鮮やかな道があると励まされている。

以上、第6巻の教会事情の「おさしづ」における「道」の用例を確認してきた。そこでは「道」が用いられることは非常に少ないが、何らかの変更を余儀なくされた教会の歩みに対しては、皆が教えを頼りに教祖を慕い行く心を治めるようにと、これからの歩むべき「道」が示されている。